

うかがふをうたれじとよいいして、つねにうしろを心づかひ去たるけしきもおかしきに、いかにしてけるにかあらん、うちあてたるはいみじうけうありと、うちわらひたるもいとへばへし、ねたしと思ひたることはり也、ごぞよりあたらしうかよふ、むこのきみなどのうちへまいるほどを、こゝろもとなく、ところにつけて、われはとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにた、すまふを前にゐたる人は心えてわらふを、あなま〜とまねきかくれど、きみ見去らずがほにて、おほどかにてゐたまへり、こゝなる物とり侍らんなどいひより、はしりうちてにぐれば、あるかぎりわらふ、おとこ君もにくからずあいぎやうづきてゑみたる、ことにおどろかず、かほすこしあかみてゐたるもおかし、又かたみにうちて、おとこなどをさへぞうつめる、いかなる心にかあらん、なきはらだち、うちつる人をのろひ、まが〜、ま〜いふもおかし、内わたりなどやむことなきも、けふはみなみだれてかしこまりなし、

〔狭衣〕四十五日○正月には、わかき人々こゝかしこにむれるつゝ、をかしげなるかゆづゑ引かくしつゝ、かたみにうかゝひ、又うたれじとよいいしたるすまひおもはくども、おの〜をかしう見ゆるを、大將殿は見給ひて、まろをあつまりてうて、さらばぞたれも子はまうけん、誠に去るしある事ならば、いとふ共ねんじてあらんなどの給へば、みな打わらひたるに、いと〜いまはさやうなるあぶれものいでくまじげなる世にこそと、うちさ〜めくもありけり、わか宮ぞちひさきかゆづゑを、いとうつくしき御ふところよりひき出て、うち奉り給へば、うちゑみ給ひて、あなうれしや、宮のあまりかたじけなくおぼえ給ふに、わたくしの子まうけつべかりけりと、かひ〜しくよるこび申し給ふもをかし、

〔辨内侍日記上〕正月○寶治三年十五日、月いとおもしろきに、中納言のすけどの、人々さそひて、南殿の月見におはします、月華門より出て、なにとなくあくがれてあそぶ程に、あぶらのこうちおもて